

葉集を読む

松岡 隆子

何はさて家の間口の雪を掘る

矢作 裕子

朝起きると真つ先に家の前の除雪をするというのは雪国に住む人々の日課であろう。故に掲句のような句はよく見かけるが、その多くは〈雪を掻く〉と詠まれている。掲句の〈雪を掘る〉には矢作さん自身の息遣いが感じられ実感の強さがある。一度に降り積もる雪の高は40センチ程にもなると聞く。大きなスコップを突きさして雪を掘り上げる作業は女手には重労働であろう。ご夫君亡きあと女手一つで暮しを守る矢作さんに、〈身の程の幸せ日脚伸ぶことも〉の日々があることを嬉しく思う。

霜の夜のしづけさといふ音ありぬ

醍醐喜美枝

霜が降るのは地表面付近の気温が氷点下になった時で、晴天無風の夜に多い。身の芯まで凍てつくような夜の寒さの中、霜の降る有るか無しかの音が聞こえる。霜の夜のしーんと静まり返った音であり、心の耳が聞きとめた音である。

寝入るかな雨が雪へと変はるころ

堀 真智子

いつの間にか雨が降り止んで予報通り雪になったようだ。降る雪の幽かな音を感じながらいつしか心地よい眠りに落ちる。しんしんと降り積む雪は、三好達治の詩のように家々を眠らせ人々を眠らせる。

〈寝入るかな〉という上五の詠嘆の「かな」が、中七下五の静かな時間の流れと相俟って一句の余情を深めている。

人日の乱れ初めたる壺の花

岡 美穂

人日とは一月七日のこと。七日ともなると正月用の生花も千両の実などが二つ三つ零れたりして少しずつ形が崩れはじめる。七日はまた門松や注連飾りを取り、正月気分から普通の生活に戻る日でもある。岡さんはいま明日から始まる日常の気忙しさを思いながら、壺の花を整えなおしている。

大寒や力を抜けと言はれても

宮崎美智子

二十四節気の小寒の日から立春前のおよそ三十日間の寒は一年のうちで最も寒さが厳しい時期である。その寒さが一段と厳しくなるのが大寒である。大寒と聞くだけで自ずと体力が入り身構えてしまうのである。〈力を抜けと言はれても〉の「も」の後の空間に味わいがある。かたくなに大寒に対峙するという感じでもなく、どこかふーっと肩の力を抜いているようでもあり不思議な魅力を感じる。